

五 一八世紀後半の社会と文化

(一) 水害と飢饉

寛延・安永年間「世用日記」には、田野の水害の記録が散見される。一七五〇（寛延三）年から一七八〇（安永九）年までの三〇年間を見ても、次のとおり毎年のように洪水などが起こっている。

- 一七五〇（寛延三）年四月 洪水大浪
- 一七五一（宝暦元）年六月 大西風大浪、大川洪水、浜口東ノ堤半分程崩
- 一七五二（宝暦二）年八月 大水
- 一七五四（宝暦四）年八月 大洪水保佐材木夥敷散乱
- 一七五七（宝暦七）年七月 田野浦町中大水入、潰家十軒、大橋落通路断絶

- 同年 九月 大雨風大浪、東町家二三軒打潰ス
- 一七六〇（宝暦一〇）年九月 大風雨、大洪水、田野町中庭迄水入
- 一七六二（宝暦一二）年六月 大雨大洪水、前代未聞ノ渡場大堤三四十間切
- 一七六四（明和元）年四月 大雨悪水出荒神ノ後ノ堤へ切込取苗流失
- 同年 七月 大雨風大洪水堤切、田野水門ヨリ下モ大傷
- 一七六七（明和四）年八月 大風雨大浪洪水、田野町中水入大橋落
- 一七七二（明和九）年八月 一二日ヨリ二〇日迄降続、福田寺大門吹倒、木番二三人浪ニウタレ死
- 一七七四（安永三）年九月 大浪前代未嘗有町中浪入、凡家数百六十軒余材木拵木町へ入
- 一七七五（安永四）年七月 大浪
- 一七七六（安永五）年秋 大浪
- 一七七九（安永八）年正月 大雨大風北風、水門崩レ町中水入
- 同年 七月 大洪水、潮江堤切込流家潰家数々
- 同年 八月 大雨大浪、新町浜田へ波打越ス

このように、田野は絶えず奈半利川の氾濫と大浪による海岸部からの浸水に悩まされた。なかでも、一七五一年、一七五七年、一七六二年、一七七四年の被害は甚大であった。また、洪水時は岡地や西福寺などに避難していたことも記されている。

天明年間 天明年間（一七八一〜八九）に入ると、まず一七八一（天明元）年五月に北風大雨、七月に大時化・大雨洪水、八月にイナサ風（南東の強風）・大水、同じく八月に大雨大雷と続き、それぞれ浸水などの被害をもたらした。翌一七八二年には、まず五月四日に大風雨大浪北風で町中に海水が入り、床上まで浸かった家もあった。五月二五

日には北からの強風と大雨大浪で田野・奈半利の堤が損傷し、また五月から七月にかけて長雨が続いたため、稲にウンカが発生して凶作となり、米価が六〇匁から七〇匁、八〇匁、さらには一〇〇匁へと高騰した。八月八日にも大雨が降り、大川古堤の決壊で一〇〇軒にも上る家屋が潰れる被害が発生した。さらに八月二〇日には大風、九月二日は風雨、一〇月一五日は大水と、自然災害が相次いだ。

天明の飢饉 一七八二（天明二）年に田野を襲った度重なる災害に対して、藩は同年一二月、浦分に一八〇石、郷分に六四石の補米を越年のための生活資金として支給した。

しかしこれも焼け石に水で、米の騰貴は人々の生活を直撃し、翌年になると草の根を掘って飢えをしのぐほどの惨状に陥った。田野では有力な百姓や商人たちが飯米などを出し合って難儀人の支援を行ったものの、抜本的な救済策にはなり得なかった。

一七八三年三月一九日付の浦廻り門吉による浦分巡見報告では、田野は林業が基幹であるのに近年は伐採許可が下りず、漁業も不振で、多少の援助があっても「渡世」がなければ苦しいと分析している。春には麦の収穫期を迎えたが、麦穂を盗む者が後を絶たず、六月には再び洪水に見舞われた。

同年いっぱい、さらには翌一七八四年の正月にかけて、飢饉の状況はいつこうに改善せず、多くの餓死者が出るとともに病氣も広がった。一七八三年六月から翌一七八四年六月までの間に、土佐一國で家数が二〇四軒、人口は二三六六人減少しており、なかでも田野は一八一人もの減となっている。

水害 『世用日記』『新井来助日記』によれば、一九世紀前半も次のようにたびたび水害に見舞われている。

- 一八〇一 (享和元) 年七月 大水、田野等田地砂入
- 一八一五 (文化二二) 年七月 奈半利川堤水押、内町分軒口限水入、新町分モ水来リ
- 一八二六 (文政九) 年五月 大時化、洪水家々吹ハキ潰家納家数々
- 一八三二 (天保三) 年九月 雨有リ大水出ル、田野新町迄打入候程三度大浪アリ
- 一八三五 (天保六) 年七月 大水大風也并関大傷
- 一八三七 (天保八) 年八月 大雨、一二月大水出ル、大浪ニ而田野浜田迄大浪打込

南海大地震 敗戦の傷跡も癒えない一九四五（昭和二〇）年二月二日未明、高知の東南二五〇キロメートルを震源とするマグニチュード八・一の地震が発生し、津波も伴って東海から九州にかけての広い地域に被害をもたらした。特に四国の被害は大きく、安芸郡では三〇人の死者、五人の行方不明者が出た。ただ田野町については、幸い大

きな被害を受けずに済んだ。

第二節 災害対策

一 過去の主な自然災害

風水害・突風被害 図表7-12及び7-13は、これまでの主な風水害、突風被害をまとめたものである。本町は古くから、奈半利川の堤防決壊に悩まされた地域である。近年は改修等が進み堤防決壊は起こっていないが、気候変動の影響もあって記録的な豪雨がたびたび発生し、それに伴う支川の氾濫や内水滞留も生じている。

例えば一九九九（平成一一）年八月一〇日、熱帯低気圧の通過によって発生した豪雨では、田野町は一七〜一八時

図表7-2 風水害の履歴

西暦	年号	概要
1889	明治22年	大洪水、奈半利川堤防決壊
1899	明治32年	8月 暴風雨、奈半利川堤防決壊、大被害を受ける
1907	明治40年	大洪水、再び奈半利川堤防決壊、大被害を受ける
1912	大正元年	大暴風雨来襲、大洪水、家屋流失、小学校倒壊
1934	昭和9年	9月 室戸台風来襲、被害甚大
1945	昭和20年	10号台風の来襲により晩稲全滅する
1975	昭和50年	台風5号・6号来襲、被害甚大、田野堰崩壊
1999	平成11年	8月 大雨。田野で1時間70mmの豪雨。上地、千福等で浸水。立岡で土砂崩れ。
2003	平成15年	8月 台風10号。倒木により家屋の一部が破損。芝で床下浸水4棟
2008	平成20年	6月 大雨。床下浸水：芝5棟、日野3棟、千福5棟、上地7棟
2011	平成23年	7月 台風6号。田野で1日最大降水量記録更新。芝で床下浸水1棟
2011	平成23年	9月 台風12号(紀伊半島豪雨)。本町で1日2時から4日24時までの総雨量344mm
2012	平成24年	7月 大雨(九州北部豪雨)。本町で時間降水量記録更新。床上浸水：芝1戸、上地7戸、浜田1戸 床下浸水：芝1戸、上地7戸、浜田1戸、淌溝2戸

図表7-3 竜巻等の突風の履歴

西暦	年号	概要
2008	平成20年	6月29日 安芸市土居地区で竜巻。住家一部破損2棟、ビニールハウス被害(倒壊2棟、全壊、半壊7棟)
2012	平成24年	7月12日 芸西村で竜巻とみられる突風。農業用のハウスや倉庫、作業小屋30棟が全半壊
2012	平成24年	10月23日 奈半利町で突風発生し、住家一部損壊等
2013	平成25年	9月4日 安芸市と宿毛市でそれぞれ竜巻が発生。ビニールハウスの一部損壊や住家の屋根瓦のめくれ、樹木の枝折れ等
2020	令和2年	1月8日 本町で竜巻とみられる突風。住家一部損壊31棟、公共施設2棟、農業用の倉庫が2棟損壊した

の一時間に七〇・五ミリ、一六〜一九時の三時間に一四三ミリの雨量を観測した。土生岡にある農業用ため池四か所と池谷川が越水し、立岡、土生岡、開の六〇世帯約一八〇人に避難勧告が出された。日野、芝、上地の一〇戸が床上浸水、五〇戸が床下浸水した。立岡では裏山が崩れ、民家に土砂が流入したほか、田野町から北川村に通じる県道西谷田野線が通行止めになった。

また、この集中豪雨によって大野用水路が一二か所寸断されてポンプの汲み上げができなくなり、稲穂が出始めたいちばん大切な時期に水田に水が送れない事態となった。そのため、近くの園芸用水池から分水してもらうことで急場をしのいだ。

この豪雨で越水した池谷川は、町北部から南向きに流れる長さ三・八キロメートルの川で、奈半利川の一次支川にあたる。一九七五(昭和五〇)年の台風被害をきっかけに改修工事が始まったが、地元の反対で一九八四年に中止されていた。被害から一年が経過した二〇〇〇年一月には、池谷川河川改修計画検討会の初会合が開かれた。計画段階から地元住民に参加してもらい、理解を得ながら改修計画を進めていくことになったものである。

地震・津波 土佐湾沖には地震発生の原因となる二つのプレートが重なり合っていて(南海トラフ後述)、絶えず動き続けている。そのため、過去に幾度も大地震が発生しており、津波による被害も生じている。東海地震や東南海地震との連動型も多く、一七〇七(宝永四)年の潮岬沖を震央とする宝永地震は、二〇一一(平成二三)年に東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)が発生するまで、記録に残る日本最大級の地震とされてきた。田野地域では、直近の昭和南海地震では、特筆する被害はなかったとされているが、一六〇五(慶長一〇)年の慶長地震では、大津波で、田野平野一面に海水が入り、溺死者も相当あったとされている。

図表7-1は、高知県沿岸部においてこれまで起こった主な地震・津波をまとめたものである。

南海トラフ巨大地震 駿河湾から遠州灘、熊野灘、紀伊半島の南側の海域及び土佐湾を経て日向灘沖までのフィリ

ン海プレート及びユーラシアプレートが接する海底の溝状の地形を形成する区域を「南海トラフ」という。この南海トラフ沿いのプレート境界では、①海側のプレート（フィリピン海プレート）が陸側のプレート（ユーラシアプレート）の下に一年当たり数センチメートルの速度で沈み込んでいる。②その際、プレートの境界が強く固着して、陸側のプレートが地下に引きずり込まれ、ひずみが蓄積される。③する

図表7-4 地震・津波の履歴

地震名	西暦	規模	概要
白鳳地震	684年	M8.4	土佐で甚大な津波被害。「続日本記」に「土佐国の田苑五十余万頃（五十万町）没して海となる」と記されている
仁和地震	887年	M8.5	震源域は阿波・紀伊沖。津波も伴い、建築物の倒壊、多くの死傷者を出した
康和地震	1099年	M8.3	南海地震と推定されている。土佐で田約1,000haが海に沈む津波。2年前に東海・東南海地震と推定される永長地震
正平地震	1361年	M8.5	震源域は阿波・紀伊沖。津波で土佐にも被害
慶長地震	1605年	M7.9	東海・東南海・南海連動型地震。大津波で、田野平野は一面に海水が入り、溺死者も相当あった。甲浦・室戸岬等で死者800人以上
宝永地震	1707年	M8.6	南海トラフのほぼ全域にわたってプレート間の断層破壊が発生。震央は潮岬沖。10回余りの大津波が寄せ、高知県沿岸の津波は5～26m
安政南海地震	1854年	M8.4	東海・東南海・南海連動型地震。震源は阿波・紀伊沖。約32時間前に浜名湖沖を震央とする安政東海地震が発生。津波は土佐で11m、須崎で8.5m
昭和南海地震	1946年	M8.0	震源域は潮岬沖。本町では大きな被害はなかったが、高知県全体で死者・行方不明者679人、家屋流失500棟以上。宇佐、須崎、上川口で5mの津波
チリ地震	1960年	M8.3	太平洋岸の広い地域に1～4mの津波。全国で死者・行方不明者142人。県内は負傷者1人、全壊7棟

資料：地震調査研究推進本部「高知県に被害を及ぼした主な地震」、高知県地方気象台「高知県に影響する地震津波について」ほか

と、次第に陸側のプレートが引きずり込みに耐えられなくなり、限界に達して跳ね上がる。

こうしたメカニズムで発生する地震が「南海トラフ地震」であり、①②③が繰り返されることで、これまでにおよそ一〇〇～一五〇年ごとに発生している。前回の南海トラフ地震（一九四四年の昭和東南海地震及び一九四六年の昭和南海地震）が発生してから七〇年以上が経過した現在では、次の南海トラフ地震発生の切迫性が高まってきている。気象庁は二〇一九（令和元）年の段階で、今後三〇年以内に発生する確率は七〇～八〇%としている。